

学位申請論文の要旨

本論文は、人の被服行動が、幼児期の被服行動を礎とし、成長過程で、どのように変化していくのか、その変化はどのようなものが影響しているのかを明らかにすることを目的としている。

第1章では、本論文全体の構成を紹介する。本論文の意義と目的を紹介した後、3つの実証研究の概略を述べる。

第2章では、被服行動と関係する語彙の定義と、その発達的变化に関する本論文の理論的枠組みを提示し、その後、本研究が対象とする乳幼児期から青年期までの被服行動と影響する諸要因についての国内外の先行研究を概観した。被服行動は包括的な概念であり、そのなかに被服関心や被服態度、被服重要性等の諸概念が含まれるとされる。被服関心の内容を精査した Gurel & Gurel (1979) の研究や、それをもとに日本語版の尺度開発を行った神山 (1983) の研究では、被服関心は外観や内面に関する多次元の意識により構成されることが明らかになっている。また、永野 (1994) は、被服行動のなかでもより客観的に測定しうる側面に着目し、流行性、機能性、適切性、経済性が被服の選択・使用行動において考慮されていることを示している。上記の研究を踏まえ、本研究では被服行動全体を、内面的な被服関心と、購入・選択などの実践的な行動（以下、被服の実践的行動とする）という2つの要素で構成されるものと見なす。この被服行動が、乳幼児期から大学生に至るまでどのような発達的变化をとげるのかについて、本研究の理論的枠組みを示すモデル図を作成した。

その後、乳幼児期から大学生までの被服行動に関する先行研究を概観した。乳幼児期においては、子ども自身が被服行動をとることが難しいため、母親が子どもの被服をどのように購入・選択しているかという被服援助をテーマとしたものが多い。多くの研究を通じて、母親は乳幼児に対して着用場面や性別に応じた被服選択を行っており、乳幼児に対する母親の被服援助が、健康や発育面だけでなく、子どもの置かれた環境への配慮を含んだものであることが明らかとなった。ただ、幼児期でも後半になると、子ども自身が被服行動に対する意見をもつようになり、母親の被服援助のなかでそれが考慮される場面が増えることもわかった。小学生を対象にした被服研究では、いち早く被服関心が高まる女子を対象としたものが多くなる。小学生の間に、親との被服の購入が本格化し、親任せの状態から徐々に自立した被服行動へ移行する準備期間であるといえる。また、被服に関する社会的比較も高まり、被服選択に保護者以外の影響が顕在化してくる時期であると見なしうる。この傾向は中学生の被服行動においても共通しており、この時期の研究では、小学生と比較して家族の影響が弱まる反面、友人や、メディア、ブランドなどの社会的影響が強まることをテーマとしたものが多かった。さらに、高校生の被服行動でも社会的影響が強まることを示すものがみられたが、それと同時に、ジェンダー、アイデンティティとの関連を検討する研究も増え、確立されつつある自己と被服行動の関連もこの時期の重要な研究テーマであることがわかった。最後に、大学生を対象とした被服研究は爆発的に増え、特に女子大生を対象とする研究が数多く行われていた。被服の選択や購入における自立の傾向が強まり、流行性やブランドなど、それまでの時期にはさほど重視されていなかった要素も大きな影響力を持つようになるが、友人やメディアからの社会的影響も引き続き強くみられる。そのなかで自己概念や自己イメージが関連していることを示す研究

も多く、この時期の被服行動に関連する要因は複雑・多様であることがわかった。社会状況が変わると変わっていくものも多々あり、その時々には多様な観点からの研究の継続が望まれる。

第3章では、現代における幼児期の被服行動を幼児の被服関心と保護者の被服援助の2側面から捉え、両者の関連や、被服行動と保護者の性役割意識や養育態度、幼児の性別や年齢といった諸要因との関連を明らかにする実証研究の結果をまとめた。

主要な結果として、まず、幼児の被服関心と母親の被服援助には多くの点で関連があり、被服行動をめぐる両者の相互作用の存在が示唆された。幼児期の被服関心の男女差については、女兒は男児より友達の被服を気にしたり、被服によって気分をよくしたりする傾向があり、逆に男児は女兒より被服に対して快適性を求めているなど、被服の関心の方向性に男女差があることがわかった。このような性別の違いは、母親が女兒であれば流行を取り入れ、男児であれば機能性を重視するという、被服援助の性別の違いによるものであることが推察された。

第4章では、被服への関心が高い女子短大生を対象に、幼児期から現在（短大生）までの間に被服行動がどのように変化したかについて、年代ごとに振り返る形で調査し、幼児期に見られる被服行動の個人差とそれ以降の関連を検討した実証研究の結果を報告した。全体として、被服関心や被服の実践的行動には様々な要因が関係し、成長につれて概ね他者からの目を意識した被服行動に変わっていくが、幼児期で培った被服行動が青年期にまで影響する側面とそうでない側面とがあることが明らかになった。

幼児期は、被服の購入の決定は母親や家族が行っていることもあり被服への関心は概して低いが、生理的な欲求に近い快適性への嗜好だけは、その後の時期と同程度に既に高く評価されていた。実践的行動の点では、他の年代より流行を意識せず、機能性を重視した服装をしていた。また、その場に合った適切な服装をすることは、他の年代と同程度に高かった。小学生以降になると、自分らしさや似合いの良さへのこだわり、被服による性差意識、服装による気分の高揚などの被服関心が成長とともに高まり、とりわけ小学生後半から中学生にかけて変化が大きいとの結果が得られた。また、これらの被服関心が高まる頃から、流行の服装をし始め、経済性や機能性を重要視しない被服の実践的行動がみられた。

しかし、幼児期の個人差とその後の変化から、上記の傾向が当てはまらない場合があることも明らかとなった。被服関心のなかで、被服による性差意識や、服装による気分の高揚などは、幼児期に既に関心が高い場合、小学生後半から中学生にかけても変化がなく、幼児期の関心の高さを短大生まで維持させていた。被服の実践的行動については、幼児期がどうであれ、短大生になると流行を考慮し、機能性をあまり重視せず被服を選ぶことがわかった。一方で、被服の経済性や適切性については幼児期の行動の差が継続していた。被服の実践的行動の発達的变化は、主体者が母親や家族から自分自身への移ったことによる変化とも考えられる。そのなかで、経済性や適切性に関連する被服行動は、保護者の被服援助などの差が成長後も維持されるものと推察される。

第5章では、被服への関心が高い女子短大生を対象に、以下の3つの目的に基づく実証研究の結果を報告した。3つの目的とは、（1）被服選択における正と負の理想自己の内容を分析し、分類すること、（2）被服選択における正と負の理想自己と友人関係の志向性や被服行動との関連性を検討すること、（3）青年女子の被服選択における正と負の理想自己のパターンの違いによってクラスター分けを行い、各クラスターの友人関係の志向性や被服行動の特徴

を明らかにすることであった。

被服選択における正の理想自己は「きれいさ」、「かわいらしさ」、「精神的強さ」の3因子で構成されており、外見のみならず内面の良さも含む概念であった。一方、負の理想自己は、社会生活を送るうえで悪印象につながる要素を集めた「社会的負のイメージ」因子と、人との関わりで友好的でない印象を示す「非友好的」因子の2因子で構成されていた。また、人により正負どちらにもなりうる理想自己として、「派手・個性」因子が抽出された。

正の理想自己を強く意識する人は、友好的な人間関係を結ぶことや、ジェンダーに合わせることを志向する人であるとの結果が得られた。負の理想自己は、広く友好的な人間関係を結ぼうとする気持ちと関係があった。負の理想自己が、被服関心において似合いを意識することや、被服の実践的行動において適切性や経済性と関連していたことも、他人から否定されたり問題視されたりしたくないという心理の表れだと考えられた。「派手・個性」因子の結果は、被服の派手さや個性を正の理想とみなすか負の理想とみなすかが、人によって正反対であることがわかる。派手さや個性を理想とする人は、被服による自己の心理的高揚を重視し、被服の適切性はそれほど考慮せず、友人関係においては自己主張をもとに分かり合おうとする姿勢を有していたことから、派手・個性的な被服は自己のあり方に対する自信の表れである可能性がある。

第6章では、これまでの内容を総合して、本論文の理論的枠組みの妥当性を検討し、被服行動の発達的变化とその関連要因についてまとめた。さらに、本研究の結果を通じて、現代の青年における被服行動の今日的意義や、被服行動を通して見た青年期に至るまでの社会的行動について論じた。